



愛知工業大学 愛知工業大学情報電子専門学校
愛知工業大学 名電高校
愛知工業大学 附属中学校

目次:	
実験棟が完成	2
三重県と就職協定	2
24人が秋の卒業	3
世界 Jr. 卓球で銀	3
IWGESD 2017 開催	4
全国大会で名演	7
硬球をアートに	8
春高バレー出場	8
発行所 名古屋電気学園 〒470-0392 豊田市八草町八千草 1247 Tel (0565) 48-8177	

学園創立百五周年を祝う

名古屋電気学園の創立百五周年記念式典が十一月十日、若水キャンパス淳和記念館三階記念ホールで、学園関係者、来賓合わせて約百五十人が出席して開かれました。

「大切なのは、学生や生徒が『学んでよかった』と考える気持ち」



永年勤続表彰を受け、後藤理事長を囲んで記念撮影する皆さん



式辞を述べる後藤泰之理事長

高校吹奏楽部の伴奏で国歌斉唱した後、後藤泰之理事長が「百五年の間の、先人の方々のご努力の上に今の学園があります。お勤めいただいている皆さんが学園の一頁を築いてくださり、それが積み重なっていると、それが積み重なっているという事です。私立学校を取り巻く状況が厳しい中、本学園、各設置校がますます充実発展していくためにはどうしたらいいか。大切なのは、学生や生徒たちが『愛工大に来てよかった』『名電高校、附属中学校、



勤続45年の表彰を受ける尾之内千夫教授

情報電子専門学校で学んでよかった」と考える気持ちです。学生・生徒の満足度を上げていくことが重要なポイントであり、学園の学校に対する皆様方の愛校心で一致団結して乗り切つてまいりたいと思えます」と式辞を述べました。

四十五年、二十五年、十五年の永年勤続者合わせて十九人が表彰され、受賞者を代表して高校教員の石川聡先生が「一同を代表し、お礼を申し上げます。私ご

永年勤続表彰の皆さん

- 【勤続四十五年】三人
 - 大学工学部応用化学科教授 尾之内千夫
 - 大学工学部応用化学科教授 井上 眞一
 - 高校教諭 石川 聡
- 【勤続二十五年】九人
 - 大学工学部電気学科教授 古橋 秀夫
 - 大学情報科学部情報科学科教授 鳥居 一平
 - 高校教諭 大橋 浩二
 - 高校教諭 前田 佳子
 - 中学教諭 板倉 進
 - 専門学校教授 河合 忍
 - 専門学校教授 山田 一敏
 - 事務局財務部会計課係長 安達加奈代
 - 大学工学部電気学科教授 高井 一彦
- 【勤続十五年】七人
 - 大学工学部電気学科教授 村瀬 洋
 - 大学工学部電気学科准教授 道木 加絵
 - 大学経営学部事務室主幹 兼子 聡
 - 大学工学部電気学科准教授 坂野 慎介
 - 大学入試センター入試広報課係長 藤堂 友子
 - 大学入試センター入試広報課係長 柳瀬 瑞樹
 - 大学研究支援本部事務室係長



謝辞を述べる石川聡先生

とですが、四十五年前にコンピュータに触れる機会を与えていただき、教員として勤め、また新校舎の建設、淳和記念館の建設のお手伝いをさせていただく機会も与えていただきました。これらもすべて総長先生、理事長先生、学園の皆様のおかげと感謝しております。このような気持ちは、本日表彰を受けた皆さん一同、同じように感じているものだと思います。これからも生徒、学生、学園のために努めていきたいと思っております」と謝辞を述べました。

しめやかに物故者法要

学園の創立百五周年記念式典に続き、会場を覚王山日泰寺に移して学園の物故者法要がしめやかに営まれました。この一年間に亡くなられた十一人の方々に含む物故者のご遺族が招かれたほか、祭主の後藤泰之理事長をはじめ学園関係者や学生・生徒を合わせて約三百二十人が参列しました。読経が流れる中、後藤理事長を先頭に焼香の列が続き、物故者の冥福を祈りました。最後に後藤理事長が「先人の方々の学園に対する強い思いを忘れず、力を合わせて各学校をますます発展させていきたいと思っております」と祭主挨拶を述べました。この後、法要会場近くの学園墓地でもお参りが行われました。



焼香するご遺族の皆さん

焼香に向かう後藤泰之理事長

バイオ環境化学実験棟が完成

学園が八草キャンパス三号館別館東側で建設を進めていた応用化学科バイオ環境化学実験棟が完成し、十月二日にテープカットをして祝いました。



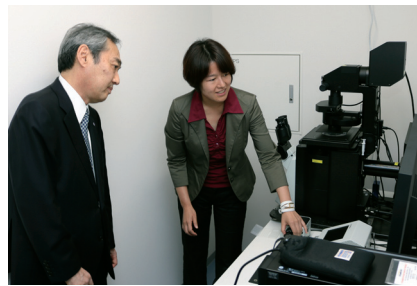
テープカットする後藤理事長(右)と岩川千行清水建設名古屋支店長

実験棟は鉄筋コンクリート造(一部鉄骨造)四階建て・延べ床面積一五七六・二一平方メートルで、高度な専門性が求められるバイオ環境化学専攻の実験にふさわしい設備を備えています。三、四階部分が多号館・三号館別館とそれぞれ渡り廊下で結ばれ、実験棟のエレベーターを利用することで全体のバリアフリー化も進みました。

テープカットは後藤泰之理事長と岩川千行・清水建設名古屋支店長の二人が行い、後藤理事長が「念願の

実験棟から新しい情報をどんどん発信していきたい」と完成を祝う挨拶をしました。

最先端の研究を生む場に



高度な実験を可能にする共焦点レーザー走査型顕微鏡

この後、応用化学科の北出幸夫教授らの案内で、真新しい建物と設備の内覧へと移りました。二階がバイオ実験のフロアとなっており、生きた細胞・組織の反応を逃さずとらえる共焦点レーザー走査型顕微鏡や、DNA組換え室、細胞培養室などを備え、最先端の研究を可能にしています。

このほか、一階に研究室と各種機器室など、三階以上に研究室・卒研室・ゼミ室や講演などに利用できる多目的室などがあり、研究の幅を広げています。

三重県と就職支援協定



本学は十一月六日、三重県と就職支援協定を締結しました。U・Iターン就職を希望する学生への支援を主な目的としており、本学と同様の協定を結ぶ自治体は長野県に続いて二番目となります。三重県にとっては本学が九番目の協定締結大学となります。

締結式は三重県庁で行われ、本学から山田英介副学長、津田紀生キャリアセンター長、大茂真キャリアセンター長、大藤統括課長、三重県から渡邊信一郎副知事、村上巨雇用経済部長、山岡哲也雇用経済部副部長が出席しました。

初めに渡邊副知事が「県内には魅力ある企業が集積している反面、人手不足に悩んでいます。学生の皆さんの就職と企業の活性化につながるよう、さまざまな情報を提供します」と挨拶し、これに対して山田副学

長が後藤泰之学長の挨拶を代読する形で「三重県の産業に寄与できる人材の育成は、本学にとつても重要な役割です」と述べました。この後、記名押印した協定書とともに携えて記念撮影し、写真⑤、今後進める連携の強化を約束しました。

三重県内には自動車・エレクトロニクス・航空機産業をはじめ多くの企業が集積していますが、生産年齢人口の減少に伴って人材確保に苦慮するなど、労働力への不足感が高まっています。さらに県外の大学に進学する学生が全体の約八割を占め、人口社会減の大きな要因となっています。

一方、三重県から本学には毎年八十〜百二十人程度が進学し、本年度は計三百九十七人が在籍しています。その中で三重県出身学生のUターン就職率は前年度の実績では21%という状況となっています。

これらを踏まえ、本学と三重県は県内の企業情報の周知、合同企業説明会の開催に関する事など六項目で連携協力し、U・Iターン就職の促進を図っていきます。

二十四人が秋の卒業／博士の学位取得者を囲み座談会

大学の平成二十九年度秋季卒業証書・学位記授与式は九月二十日、八草キャンパスA1Tプラザで行われました。

卒業したのは、博士の学位を取得した二人と、大学院経営情報科学研究科博士前期課程修了者三人、学部卒業者十九人の合わせて二十四人。学位記授与に続き、山田英介副学長が後藤泰之学長の式辞を代読する形で「皆さんが社会の発展に寄与されることを心から願っています」と門出を祝福しました。



謝辞を読み上げる韓三澤さん

これに対し、博士の学位を取得した韓三澤さんが「自身のより一層の向上に努め、愛知工業大学大学院

修了者としての自覚と自信を持ち、社会に貢献いたすことを誓います」と謝辞を述べました。

博士の学位を授与された韓さん、浅井光太郎さんの二人と、山田英介・曾我部博之両副学長らとの座談会も、引き続き本部棟で行われました。韓国出身の韓さんは「からくり観点に基づくとヨタ生産システムの獨創性と創発性——仕組みと仕掛けを中心に——と題した博士論文を書き、日本の伝統文化である「からくり」とトヨタ生産システムとの関連を明らかにしました。浅井さんの博士論文は「画像符号化における信号の圧縮と表現に関する研究」で、勤務先の三菱電機などで取り組んできた画像符号化伝送に関する研究を中心 to 考察した結果をまとめました。座談会には韓さんの指導教授の加藤里美教授、浅井さんの指導教授の中條直也教授らも同席しました。

山田副学長は困難を乗り越え目標を達成した二人を

称え「これをスタートラインに新たなご活躍を期待しています」と激励しました。二人は「先行研究がなく、論文として認められるか不安がありました」（韓さん）「最後のページまで書けたことに安堵しています」（浅井さん）などと学位取得までの苦労を振り返り、感謝の言葉を述べました。



博士号を取得した浅井さん（前列中央左）と韓さん（同右）ほか座談会に出席の皆さん

世界ジュニア卓球 名電トリオらが銀メダル

愛工大名電高校の木造勇人選手（三年）、高見真己選手（三年）、田中佑汰選手（二年）が出場した2017世界ジュニア卓球選手権イタリア大会（十一月二十六日～十二月三日）の団体戦決勝は、日本と中国が対戦。昨年に続く日本の連覇はかないませんでした。堂々の銀メダルに輝きました。個人戦でもダブルスで木造選手・高見選手のペアと田中選手・宇田幸矢選手（JOCエリートアカデミー）のペアがともに銅メダルを獲得しました。

四人しか出場できない日本代表のうち、今年は名電の選手が三人を占めました。大会直前に張本智和選手（JOCエリートアカデミー）の欠場が決まるという状況の中、エースの重責

を担った木造選手をはじめ名電のトリオがチームの屋台骨を支えました。団体準決勝の韓国戦は、準々決勝のフランス戦に続いて三時間を超える熱戦になりました。田中選手が初戦を落とした後、二番の木造選手、三番の高見選手がともにストレート勝ち。エース対決の四番は木造選手が逆転負けを喫したものの、ラストは田中選手が粘り強く逆転勝利をもぎ取りました。



木造勇人選手



田中佑汰選手（いずれも ITTF 提供）



高見真己選手



発表を行う Chris Marnay 博士

国際ワークショップ「IWGESD 2017」開催

本学が平成27年度から取り組むプロジェクト「グリーンエネルギーのための複合電力技術開拓（新エネルギー技術開拓拠点）」に関連し、より議論を深めるための国際ワークショップ「IWGESD(International Workshop on Green Energy System and Devices) 2017」が11月24、25の両日、八草キャンパス愛和会館で開催されました。

同プロジェクトは平成22～26年度に実施された文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成事業「ナノ材料制御技術による新規太陽光エネルギー利用統合技術の創出（グリーンエネルギー研究拠点）」の成果の上に立ち上げられ、再生可能エネルギーによる新エネルギー技術を中心としたグリーングリッドシステムの構築に取り組んでいます。

国際ワークショップは電気学科の雪田和人教授が議長を務め、国内をはじめ米国、台湾、タイ、ドイツ、中国、韓国から計14人の発表者が招待されました。本学の鈴置保雄総合技術研究所長が開会の挨拶で活発な議論を呼び掛けたのに続き、米国ローレンス・バークレー国立研究所のChris Marnay博士による「Heterogeneous Power Quality in Microgrids（マイクログリッドにおける異種電力品質）」から順次発表が行われました。

本学の研究者も参加し、システムの運用と材料デバイス技術の両面にわたって2日間で17件の口頭発表と43件のポスター発表があり、低炭素・資源循環社会の実現を目指して盛んに質疑を重ねました。



議論を深めたポスター発表

開設記念・バイオ創薬化学シンポジウム
 応用化学科・バイオ環境化学実験棟開設を記念し、次世代の創薬研究を考えるシンポジウムが十一月二十四日、同棟三階多目的室で開催されました。初めに同科の北出幸夫教授が「次世代医療を目指すRNA医薬の開発」と題して話しました。近年、遺伝情報そのものを治療対象とする次世代医療として、RNA干渉に基づく医薬が注目されています。北出教授はRNA

大垣共立銀行との産学連携協定締結記念セミナー
 本学と大垣共立銀行の産学連携協定締結（七月）を記念するセミナーが十一月十六日、八草キャンパス総合技術研究所視聴覚室で開催され、参加した大垣共立銀行取引先の関係者ら約六十人に向けて本学の技術シールドが周知されました。初めに、本学の鈴置保雄研究支援本部長が「さまざまなニーズをフィードバックし、ともに活動を進めたい」、大垣共立銀行の野上匡行取締役支店部長が「大学の研究と企業のコラボが地域経済のためになる」と挨拶し、産学連携の推進を



活発に質疑が行われたシンポジウム

医薬を開発する上で重要なヌクレアーゼ耐性の向上、

呼び掛けました。続いて鈴置本部長が本学の産学連携の取り組みについて説明しました。第一部のシールド発表では、「より高速なワイヤレス通信を目指して」「次世代型医療を目指すRNA医薬の開発」「刃先の研磨加工による切削工具寿命向上」「コンクリートにフェロニッケルスラグ骨材の有効利用」「AI時代の建築教育」「開腹手術映像の知的アーカイブシステムの開発」「経営学部からの産学官連携へのアプローチ」の七テーマについて、担当教

授らが発表しました。第二部では「愛知工業大学のキャリア支援の取り組みと企業が求める人材ニーズについて」と題して名大社の山田哲也社長と本学の津田紀生キャリアセンター長がディスカッションを行い、津田センター長から「社会が変わっていく時代、学生に対して会社の将来像をしっかりと説明していただければ」などと発言がありました。第三部では本学の技術シールドと各研究施設によるパネル展示を行い、それぞれの研究内容を伝えるパネルの前で参加者と教員が交流を深めました。

標的細胞や臓器へ選択的に送達するDDS機能を有するRNA分子の開発などについて述べ、これまで必須だったリポソーム無しでRNA鎖の細胞導入が可能になったことなどを説明しました。続いて岐阜大学大学院の赤尾幸博教授が「マイクロRNAのがん病態への関与」、北九州市立大学の櫻井和朗教授が「多糖と核酸の複合体の発見からベンチャー企業の立ち上げ」と題して発表を行いました。

中国・東南大から代表团 交流の深化話し合う



鄭副校長（前列左から2人目）ら代表团と後藤学長ら

いろいろなものを分かち合い、一緒に発展していくことができれば」と応えました。

懇談の中で、鄭副校長は「もつとたくさんのお客様に先生方に東南大学に来ていただきたい」と希望を述べました。後藤学長も「先生方の研究交流を活発に進めたい。それが学生同士の交流につながる。双方の学生が同じテーマで協力し、競い合う関係があつていい」と期待を表明しました。

この後、鄭建勇院長ら二人の教授が電気、応用化学の特別講義を行い、鄭副校長らは学内を見学しました。一行は十月二十二日に来日し、本学のほか京都にも足を延ばして同二十六日に帰国しました。

学生団十二人も来日

中国・東南大学の学生団が来日し、大学祭初日の十月七日、八草キャンパスを訪問しました。一行は、袁琴・学生処主任を団長とする十二人で、六日に中部国際空港に到着し、七日午前八草キャンパス本部棟で山田英介副学長らの出迎えを受けました。

山田副学長は「二十四回目となる学生交流で、今日お見えの皆さんも両校・両国を結ぶ絆になつていただきたい」と歓迎の言葉を述べました。これを受け、袁団長が「私たちも友好の一部分になれることを光栄に思います」とあいさつし、双方の近況や今後の旅の日程などについて和やかに話し合いました。

一行は懇談後、地域防災研究センターを見学したほか、工科展など大学祭の催しを楽しみました。夜は双方の学生同士でカラオケ交流も楽しみました。八日以降は岐阜県や京都、大阪方面に足を延ばし、十一日夜に名古屋国際ホテルで開かれた学生交流会に出席、十二日に離日しました。

中国との国交正常化四十五周年を記念する「次世代のための中日友好交流会」が十月二十一日、若水キャンパス淳和記念館体育館で開かれ、附属中学と名電高校中高一貫コースの生徒合わせて約六百人が、中国の鄧偉・駐名古屋総領事らと和やかに交流しました。

中国の今を紹介する映像を観賞した後、ステージには中国雑技団の若い団員たちが次々と登場。大きな口にかまれた人は頭がよくなると言われている獅子舞や、次々と繰り広げられるアクロバティックな演技

に、生徒たちは大歓声を上げて見入りました。

領事館の方々と生徒との交流・質問タイムでは、鄧総領事や孔蘊宝副領事らが、生徒たちからの「領事館で取り組んでいる名古屋との交流は?」「中国の学校行事について教えてください」といった質問にこやかに答えました。

最後に生徒代表がお礼の言葉を述べ、鄧総領事らに花束を贈って感謝の気持ちを表しました。生徒全員で中国側の参加者を囲んで記念撮影も行い、今後の変わらない友好を誓いました。

交流会では、岩間博校長がこうした学園と中国の深い縁について触れ「次代を担う若者たちの交流が、さらにお互いの理解を深める力になります」と呼び掛けました。これを受け、鄧総領事も「若者同士のお付き合いを大事にしなければなりません」と挨拶の中で強調しました。

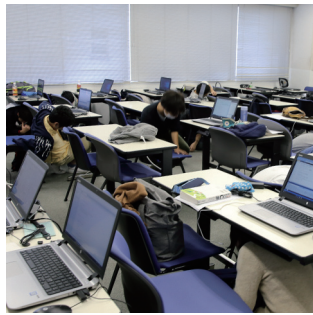
中国の今を紹介する映像を観賞した後、ステージには中国雑技団の若い団員たちが次々と登場。大きな口にかまれた人は頭がよくなると言われている獅子舞や、次々と繰り広げられるアクロバティックな演技



鄧総領事らを囲み、全員で記念撮影

学園と全設置校を挙げて防災訓練

学園と全設置校四校を挙げての防災訓練が今年も十一月九日、教職員と学生・生徒ら総勢約五六五〇人が参加して練り広げられました。訓練は午前十一時四十四分五十五秒、紀伊半島沖を震源とするM8.5の東海・東南海連動型巨大地震が発生したとの想定で始まりました。緊急地震速報のサイレンとともに「地震が来ます」の放送が各設置校に流れ、授業中の学生や生徒たちは机の下に隠れるなど退避した後、一斉に避難場所に向かいました。



机の下に退避（専門学校）

八草キャンパスでは五号館実験棟が崩落、同棟南側が一部通行困難になったほか、合宿寮二号棟一階、鉦徳館一階で火災が発生したとの想定で、担当者らが救助活動など被害拡大の防止に努めました。



避難場所に向かう（高校）



校舎の外に避難（中高一貫）

避難場所のサッカー場では、学生らが初期消火の訓練に取り組みました。設置校の名電高校、附属中学校、専門学校でも同時刻に連動して訓練を行いました。



初期消火訓練（八草キャンパス）

地区の特性踏まえ防災カルテを共同作成 豊田市と本学地域防災研究センター

豊田市と本学の地域防災研究センターが共同で作成した市内二十八中学校区ごとの「防災カルテ」が、市のホームページで公開されています。

防災カルテは、同じ市内でも都市部や山間部などで災害の特性が異なる点を踏まえ、各地区の自主防災会や学校、事業所などが正しい情報に基づいて具体的に地域防災に取り組めるよう作成されました。公開された防災カルテ

第五十七回大学祭開く

第五十七回大学祭は十月七、八日、八草キャンパスで開かれました。愛工大祭で多くの人と交流し、つながりを強めたいという願いを込めて、今年のテーマは「CONNECT」。大勢の入場客が伝統の工科展をはじめ、クラブ展示や模擬店、ライブなどの多彩なプログラムを楽しみました。工科展はA1Tプラザで開かれ、一般部門と学生チャレンジプロジェクト部門の合わせて三十五団体が出展しました。一般部門につ

は、各中学校区とも三十五ページ前後。南海トラフ巨大地震を想定した被害予測情報（震度分布図、液状化危険度分布図、建物倒壊危険度、建物延焼危険度、道路閉塞危険度、消防活動困難度など）を中心に、色分けしたマップを用いて分かりやすく提供しています。土砂災害危険箇所や洪水による浸水分布、直下でM7クラスの地震が発生した場合の揺れやすさマップ、本学の調査に基づく各校区の

いては、学生委員による審査の結果、最優秀賞は松井・武田合同研究室が受賞し、学長杯が贈呈されました。



工科展で賞を受けた学生たち

防災力評価なども併せて掲載しています。カルテの後半には参考資料として、各校区の防災活動拠点や避難場所、給水施設などの一覧が添えられました。地域防災研究センターの横田崇センター長は「カルテを活用して各地域で想定される災害の種類や危険な場所への理解を深め、具体的な避難経路の検討などを踏まえて事前の備えと訓練の実施につなげてほしい」と話しています。

同研究会は、温度変化によってユニークな特性が現れる形状記憶材料の医療用ガイドワイヤーへの応用など、研究成果を説明しました。このほか優秀賞は自動車研究室とシステム工学研究会、瑞若会（同窓会）賞は奥川研究室に贈られました。表彰式で、鳥井昭宏教授センター長が「今回の成果を皆さんの自信として学生生活を送っていただきたい」と激励しました。

大学祭初日には秋季オープンキャンパスも同時開催され、高校生、保護者ら計五百十四人が訪れました。

最多40回目の全国大会で名演



全日本吹奏楽コンクールに40回目の出場を果たした愛工大名電高校吹奏楽部

高校吹奏楽部は十月二十二日に名古屋国際会議場で開かれた第六十五回全日本吹奏楽コンクールに高校部門全国最多となる四十回目の出場を果たし、銀賞に輝きました。自由曲には「宇宙の音楽」(P・スパーク作曲)を選び、顧問の伊藤宏樹教諭の指揮により、楽曲の世界観を情感豊かに表現しました。演奏が終わると同時に声援と大喝采が起る名演となりました。

また十一月十九日には大阪市の大阪城ホールで開かれた全国大会に出場し、銀賞を受賞しました。十月十四日に日本ガイシホールで開かれた第三十一回東海マーチングコンテストで金賞・朝日新聞社賞を獲得、東海支部代表としての出場です。「フエスティバル・ヴァリエーション」など三曲を披露し、迫力の演奏に観客席から大きな拍手が贈られました。

新春1月9日、センチュリーホールで定期演奏会

附属中の篠塚選手が二冠

十一月十・十二日に熊本県立総合体育館で開催された平成二十九年度全日本卓球選手権大会(カデットの部)の十四歳以下男子シングルスで、附属中卓球部の篠塚大登選手が優勝しました。

篠塚選手は、濱田一輝選手(附属中卓球部)と対戦した準決勝、原田春輝選手(石田卓球クラブ)と対戦した決勝



篠塚選手(左)と濱田選手(ニッタクニュース提供)

ルスで鈴木颯選手が三位、男子ダブルスで谷垣佑真・鈴木颯選手が二位などの成績を収めました。

ともに、ゲームオールの接戦を勝ち抜きました。篠塚選手は濱田選手とペアを組んだ男子ダブルスでも優勝し、二冠を達成しました。

このほか、附属中卓球部の選手たちは十四歳以下男子シングルスで濱田選手が三位、十三歳以下男子シングル

A・I・Tサイエンス大賞開く

科学技術立国を支える若者の育成を目的に本学が制定するA・I・Tサイエンス大賞の研究発表会が十一月四日、八草キャンパスで開催されました。愛知、岐阜、三重、静岡、長野各県の高校生に呼び掛けて論文・作品を募集、成果を顕彰しており、今年で十六回目。「自然科学」「ものづくり」「社会科学・地域づくり」の三部門で、今回も三十六校から過去最多だった昨年と同数の五十八テーマの発表があり、衰えない理系人気を



5分の持ち時間で行われたステージ発表



パネル展示会場で交流する生徒たち

印象付けました。午前中は部門別にステージ発表があり、チームを組んだ生徒たちが各テーマ五分間の持ち時間でプレゼンテーションを行いました。午後は一号館やA・I・Tプラザでパネル展示発表し、さらに詳しく説明しました。パネル展示の会場では高校生同士が質問し合い、交流と理解を深めていました。内田一教授(自然科学

部門)、杉野丞教授(ものづくり部門)、石井成美教授(社会科学・地域づくり部門)ら本学の専門教員二十七人が委員となって発表の獨創性や工夫、コミュニケーション力などを審査し、次の学校・テーマが優秀賞を受賞しました。

【自然科学部門】愛知県立刈谷高校「劣化したシャトルコックの軌道」、愛知県立岡崎高校「キイロシヨウジヨウバエの発生に対する光の影響」、岐阜県立多治見北高校「多治見の局地気象研究 川を上る風」

【ものづくり部門】愛知工業大学名電高校「コエカタマリン」プロジェクト、愛知県立瑞陵高校「あったかホカホカ発酵熟<small>solid</small>」、愛知県立岡崎工業高校「設計技術から学ぶ単環縫いミシンの製作」

【社会科学・地域づくり部門】名古屋市立名古屋商業高校(B)「出前授業で小中学生に伝えること」、愛知県立刈谷高校「生物多様性調査刈谷市及び周辺地域の在来種をのぞいて」、愛知県立新城高校(A)「学校堆肥の流通に関する研究」

使い古し硬球をアートに



二〇二〇年の東京五輪で野球が十二年ぶりに競技種目として復活することを祝い、台湾出身でニューヨーク在住のアーティスト林世宝さんが「希望の樹」と名付けたプロジェクトを進めています。「希望の樹」とは、使い古しの野球の硬式球を日米などで募集して、二万五千個をLED電球一万個とともに組み上げる高さ約八メートルのモニュメント。聖火のように各国を巡った後、東京五輪の野球会場に飾ることを目標にしています。日本でボール集めの窓口になっている春日井市の瀬戸和江さんに、学園からも古い硬式球が託されました。

愛工大名電高校野球部は十月二十六日、春日井総合運動場内の野球部練習場「後藤淳記念球場」前で、倉野光生監督と西脇大晴主将から、三百個の硬式球を瀬戸さんに手渡ししました。

写真①。猛練習で使われた

ボールは、どれも縫い目がほどけ、革が破れていきます。「ここからさらにテープを巻いて練習で使うんですよ」と倉野監督。瀬戸さんは丁寧にお礼を述べ、一輪車で運ばれてきたボールをいとおしそうに自分の車の荷台に積みこみました。

林世宝さんは、二〇〇五年の愛・地球博で「平和行進曲Ⅱ 智恵の門」と名付けた使用済みのペン三十万本による門のモニュメントを出展。瀬戸さんは、このときのペン集めを手伝った仲で、学園も制作場所や使用済みのペンの提供に協力しています。古いボールを集めたモニュメントは、夢を追った多くの選手たちの人生を象徴しています。そんなボール集めの大役を担う瀬戸さんは、笑顔の一方で「海外に送るとき土がついていると検疫に引っかかる。どうやってきれいにしようかしら」と悩みも話していました。

コムスプロジェクト始動

本学が豊田市から一人乗り電気自動車「COMS(コムス)」の貸与を受けた学科横断的な活動が始まり、十一月二十三、二十六日、豊田市駅前に開業した複合施設「KITARA」のオープニングイベントに最初の成果が出展されました。COMSは豊田市のEVシェアリングサービスが用いる電気自動車と同型で、建築学科・中井孝幸研究室の学生たちが豊田市内の学校などを夜空の星に見立てたデザインにラッピング。電気学科の道木加絵准教授、矢野良和准教授、情報科学科の松河剛司准教授らもイベント出展に協力しました。



KITARA オープニングイベントに出展されたCOMS

VR技術を用いた遠隔操縦や隊列走行・自動駐車に関する研究をはじめ、制御プログラムづくり、競技会、デザインコンテストなどに幅広く活用されます。

春高バレー出場決めた!



優勝を決め喜びを分かち合う部員たち

高校バレーボール部は十一月二十三日、愛知県体育館で開かれた第七十回全日本バレーボール高校選手権の愛知県代表決定戦に出場し、星城高校に3-0(25-20、25-21、25-18)でストレート勝ちして三年ぶり十五回目の「春高バレー」出場を決めました。愛知県予選の決勝を星城高校と争うのは、これで五年連続です。応援合戦もヒートアップする中、名電の選手たちは終始優勢な戦いぶりでした。同部は今夏のインターハイでは過去最高タイの三位の成績を収めており、来年一月四日に始まる春高バレーでも二〇一五年出場時の三位を上回る活躍が期待されています。

市民美展で二人が受賞

今年の豊田市民美術展デザインの中で、専門学校情報工学科DTP・Webデザインコース二年の鈴木祥平さんの「豊浜 鯛祭り」が豊田市教育委員会賞、同一年の西尾郁哉さんの「カク煮」が審査員特別賞に、それぞれ選ばれました。

作品はいずれもポスターで、鈴木さんの「鯛祭り」は、十斤を超える骨組みに白木綿を巻いて作った鯛が若者たちに担がれて海に入り、豊漁と海の安全を祈願する祭りの迫力がダイナミックに表現されています。西尾さんの「カク煮」は、核兵器を「角煮」にたとえ、見る人に核兵器について考えさせる作品です。一人は「受賞できたことが今後の制作の励みになります」と喜びを話しています。



西尾郁哉さんの作品「カク煮」



鈴木祥平さんの作品「豊浜 鯛祭り」